

第52回 全国児童才能開発コンテスト

作文部門入賞者一覧

◆ 文部科学大臣賞 〈低学年の部〉

青森県上北郡七戸町 城南小学校 3年 工藤海音

◆ 文部科学大臣賞 〈高学年の部〉

神奈川県川崎市 カリタス小学校 4年 今野せいら

◆ 全国都道府県教育長協議会会長賞

愛媛県八幡浜市 宮内小学校 1年 菊池 優真
 東京都新宿区 学習院初等科 2年 青木 美咲
 愛知県岡崎市 岩津小学校 3年 内田 陸也
 愛知県蒲郡市 塩津小学校 4年 前場 紫歩
 愛知県岡崎市 竜谷小学校 5年 齋藤 陽花梨
 奈良県宇陀市 榛原西小学校 6年 徳永 聖弥

◆ 全国連合小学校長協会会長賞

愛知県岡崎市 矢作東小学校 1年 深見 幸生
 兵庫県宝塚市 宝塚小学校 2年 横山 和穂
 愛知県蒲郡市 塩津小学校 3年 鳥居 誠吾
 愛知県岡崎市 岩津小学校 4年 今村 颯
 愛知県蒲郡市 中央小学校 5年 小林 雅
 愛知県岡崎市 矢作東小学校 6年 江本 恵

◆ 日本PTA全国協議会会長賞

愛知県岡崎市 根石小学校 1年 清水心結
 長崎県長崎市 長崎大学教育学部附属小学校 2年 東美桜

◆ 学研賞

富山県富山市 奥田小学校 3年 小網 静空
 愛知県蒲郡市 蒲郡東部小学校 4年 横田 明日都
 宮城県気仙沼市 新城小学校 5年 佐藤 香蓮
 愛知県岡崎市 本宿小学校 6年 安達 隆志

愛知県蒲郡市 蒲郡北部小学校 1年 あおやま そう
 宮城県本吉郡 伊里前小学校 2年 遠藤 絆
 愛知県蒲郡市 形原小学校 3年 長田 慧
 愛知県刈谷市 平成小学校 4年 酒井 蘭名
 愛知県蒲郡市 竜美丘小学校 5年 藤井 和奏
 愛知県蒲郡市 蒲郡東部小学校 6年 山本 稜

◆ 菅公賞

富山県富山市 九条小学校 1年 小野 健太郎
 宮城県蒲郡市 西浦小学校 2年 竹内 絵里菜
 愛知県蒲郡市 山口県下松市 下松小学校 3年 渡邊 陽向
 愛知県蒲郡市 蒲郡東部小学校 4年 坂本 彩乃
 岡山県岡山市 吉備小学校 5年 富田 遥斗
 長崎県長崎市 長崎大学教育学部附属小学校 6年 山道 陽輝

◆ 才能開発教育研究財団理事長賞

愛知県蒲郡市 蒲郡南部小学校 1年 川野 結
 愛知県刈谷市 富士松北小学校 2年 足立 芽里
 愛知県蒲郡市 蒲郡北部小学校 3年 広浜 花梨
 愛知県岡崎市 六ツ美南部小学校 4年 工藤 優衣
 東京都練馬区 開進第三小学校 5年 藤田 志織
 愛知県岡崎市 竜美丘小学校 6年 兵藤 結佳

菅公賞

入賞おめでとう

ほくとせい さようならありがとう

宮城県気仙沼市 九条小学校 1年

小野 健太郎

指導者 伊藤 暢子

8がつ23にちはれ。

ほくは、ならしのおばあちゃんのを6じ55ふんにできました。いまからほくとせいをみに、上野えきに行きます。ほくとせいは、しんだいとつきゅうでしよくどうしやが、ついてます。なんでみにいくのかというと、ほくとせいがきょうラストランだからです。

さいしよにタクシーのつてけいせいつだぬまにいて、けいせいでんしゃのかいそくとつきゅうのりしました。でんしゃにのれるからワクワクでした。

あおとえきで、おりてかくえきていしやのりかえます。そのあとにつぼりでおりて、けいひんとうほくせんにつて、いろいろなでんしゃとすれちがうのがたのしくて、あつというまに上野えきについちゃいました。

そしてほくとせいせんよの13ばんせんのホームにいったら、もうひとがみなとまつりみたいにいっぱいでした。そのときだんだんきもちが、さみしくなつて30ぶんくらいたつてから、なみだがとうとうでてきました。せんとうしやがいつぱいだつたので3ごうしやあたりでまつてました。

ついに、まちにまつたほくとせいがゆつくりはいつてきました。

まわりのひとが、いつせいににおおきいはくしゅをしてました。ほくもはくしゅをしました。それから、ほくとせいのタオルをうえにあげてむかえました。

みんな、おかえりなさいとか、おつかれさまなどいろいろなことばで、ほくとせいをむかえてました。だからほくもおつかれさまとおおきなこえでいきました。

ほくは、だんだんなみだがおおきくなりしました。まだのつたことがないのにもうのれないし、かつやくしてるところもみれなくなるからさみしくなりました。

ほくとせいのきもちも、27ねんかんがんばつてつかれたなつておもつてるとおもいます。ホームのひとがすくなくなつて、せんとうしやりようからじゆんに、なかをホームからみしました。しよくどうしやにすわつて、ちゅうもんをしてりようりがきたらおいしだいどうとか、しんだいにねたら、きもちいいだろうとかをそうぞうしてみてました。

そのあとはホームをでてちがうホームで、いろいろなでんしゃをみました。それから、きつぷをかっておみせでパンケーキとアイスミルクティーをたべました。

10じ40ぶんはやぶさ15ごうで、いちのせきにむかいました。しんかんせんのせきにすわつて、おばあちゃんとわかれるのと、ほくとせいのことをかんがえたら、またなきました。おみやをすぎるときまでなきました。

それからは、おとうさんといっぱいおしゃべりをしながらかえりました。ほくとせいありがとうさようなら。またゆめのなかでのせてね、まつてるよ。



菅公賞

入賞
おめでとう

カマキリが教えてくれたこと

愛知県蒲郡市 西浦小学校 2年

竹内 絵里菜

指導者 石川 幸子

ある日、学校で虫をそだてることになり、先生が、

「虫をつかまえて来てください。」

と言いました。わたしの家のには、バッタやクモやいろんな虫がいたのでにわに出てやんでいました。

そのとき、小さな赤ちゃんのカマキリはっけんしました。よく見ると花の上にとまっていたり、はっぱのうらにかくれていたりして、あっちこちにいました。カマキリをもつていってそだてることにしました。カマキリをつかまえたけど、

「何をあげたらいいんだろう。」

お母さんがしらべてくれて、水と生きているものしかたべないとわかりました。

つぎの日、お母さんといっしょにカマキリのエサを、さがしまわりました。やつのことで、小さな赤ちゃんのバッタをつかまえました。

虫かごの中であるきまわるバッタを、じつとカマキリが見ていました。バッタがちかづいて来た、そのとき、すごいはやさでカマをふりおろして、つかまえてたべてしまいました。わたしがつかまえたバッタをカマキリにたべても

らってうれしいけど、バッタがたべられてしまったのはかわいそうでした。でも、もしカマキリに何もたべものをあげないとしんでしまうからと思つて、お父さんにそのことを話したら、「じぶんもさかなや生きているものをたべてるだろ。」

と言われました。

「そうなんだ、わたしもかわいそうなことをしてるんだ。せめてありがとうという気もちで、のこさずにたべた方がいいな。」

と思いました。

生きたエサじゃなくてもカニカマやソーセージを竹ぐしにさして、カマキリの目の前でうごかしたら、たべてくれるのがわかりました。カニカマはたべてくれたけど、ソーセージはいやがってたべてくれませんでした。

でもカマキリがカニカマをとったとき、竹ぐしの先がとれました。すごい力だと思いました。

そんなとき、

「アリのままでいたい。」

というえいがを家でよく見に行きました。いろいろな虫たちのくらしをおしえてくれるえいがでした。そのカマキリは草げんでさいきょうの

ハンターだと知りました。とくにえいものをとるときスピードは、わずか0.3びょうです。

そんなさいきょうのハンターも、大きくなるまでにアリやクモにたべられて、二百びきいるさようだいのほとんどが大人になれずにしんでしまふと知りました。そして、生きのこつたカマキリだけがさいごのだつびのとき、かみさまが羽をプレゼントしてくれて、さいきょうのハンターになれるのだそうです。

なつやすみに入り、学校でそだてていたカマキリをいえにもつて帰つてにがしてやることになりました。わたしは、

「あのえいがのカマキリみたいに大きくそだつてね。」

と見おくりして、ちよつとだけそのカマキリとあそびました。ほかのカマキリは、にわに一びきも見つかりませんでした。

「えいがで見たのとおなじで、たべられてしまったのかな。」

つぎの日、じぶんがそだてていたカマキリも見つかりませんでした。

「やっぱり、たべられてしまったのかな。」

少しふあんになったけど、きつとあきには、あつよくてかっこいいハンターになつてくれるとしんじています。

わたしは草げんさいきょうのハンターのカマキリみたいに、大人までがんばりたいです。そして、いっしょうけんめいがんばれば、カマキリの羽みたくにすてきなプレゼントがまつていると思ひます。

菅公賞

入賞
おめでとう

もつとかがやけ！ 青い地球

山口県下松市 下松小学校 3年

渡邊 陽向

指導者 谷村 智美

「油井さん宇宙へ」

子ども新聞を読んでいる時、その文字が、私の目にとびこんできました。

油井さんは、宇宙飛行士になるというゆめをかなえたのです。国際宇宙ステーション（ISS）で、今どんな研究や実験をしているのでしょうか。

この記事を見ると、宇宙ってどんな所だろうと、すぐ行ってみたいになりました。「宇宙で、平和にこうけん出きるような仕事がありました！」

と答える油井さんは、どんな小学生だったのでしようか。

油井さんは、ぼう遠きようで星空をかんさつしたことがきっかけで、宇宙飛行士にあこがれるようになりました。しかし、家計の事じようから一度はゆめをあきらめ、航空自衛隊の官となつたそうです。くやしかつたことでしょう。もし私だつたら気がぬけて、何もしたくなくなるでしょう。宇宙飛行士になれなかつた事ばかり考へて、新しい仕事をする気にならなと思

います。

でも油井さんは、航空自衛隊に入つても希望を持ち続け、テストパイロットをつとめました。新しい飛行機が、安全かどうかを実際に飛んでたしかめる仕事です。その時の仕事を一生けん命やつてきたからこそ、ゆめがかなつたのです。

私のゆめは、戦争のない平和な世界を作ることです。私だけの力だけではむりかもしれないけれど、少しでもその役に立ちたいのです。

「いっしょに遊ぼう！」

「だいいじょうぶだよ！」

「仲よくして！」

と笑顔で声をかけてみる。もしも一人の悪口を言う友だちがいたら、

「やめよう！」

「いい所を見つかけ合おうよ。」

と、勇気を出して伝えていく。そういう事なら、すぐに始められそうです。

それが出きたら、次に海外の人たちとも仲よくしていききたいです。

油井さんは、今宇宙ステーション（ISS）の中で、アメリカやロシアの人たちと一しょに仕事をしています。油井さんもこれまで、えい語やロシア語などの勉強をたくさんしてきたそうです。私も今、少しずつえい語の勉強を始めています。でも、たん語をおぼえてもすぐわすれてしまうので、もういやだとやめたくなつてしまいます。油井さんは、勉強がいやになつた時、どうやつて続けることが出きたのですか。

油井さんのつぶやきの中で、

「しっぱいは恥ではなく、しっぱいをおそれて何もしない事の方が恥ずかしいのです。」

という言葉が、私の心にずっと残っています。

これまで私は、油井さんとは反対に、

「しっぱいするくらいなら、やらない方が恥ずかしくなくていいや。」

と、わかつても手を上げないことがありました。また、花火大会へ行つた時に出会つた外国人の人に、

「Nice to meet you!」

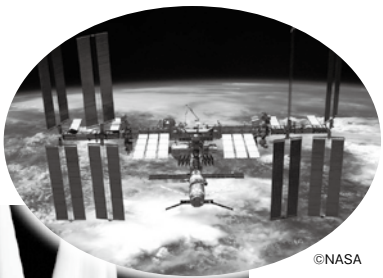
と声をかけてもらったのに、返事が出きませんでした。私が言つた言葉が、ちゃんと伝わらなかつたらどうしようかと不安になり、一言も声に出せなかつたのです。

私もこれからは、しっぱいをおそれずに、声を出していききたいです。自分の考へていることを勇気を出して伝えていきます。

五か月後、油井さんは地球へ帰ってきます。油井さんに会いたいです。私のゆめについて、話したいです。

宇宙にかぶパネルを大きく広げたISSの写真。その後ろに見える地球は丸くまっ青で本当に美しい星です。その地球に住んでいる人々が、仲よくし合いわかり合い、笑い合えたなら、もっとかがやく星になるはずです。

油井さん、私もえい語の勉強を続けていきます。宇宙について、ゆめについて、いつかえい語で話しましょう。



「おじさんなあ、ずっと前に手じゅつして、頭の中に電池が入るとるだぞ。そいで、どうしても体が動かさなくなった時に、このリモコンで体を動かすだぞ。」

と言って、リモコンを見せてくれたことがありました。わたしはびっくりしました。そんなの、テレビやまんがの中のことだと思っていました。しんじられませんでした。

おじさんがなくなった次の夜の夜、家族でお通夜に行きました。りっぱな祭だんの前に、白いひつぎが置かれていました。とびらを開けると、おじさんがねむっていました。

「おじさん、起きて、彩乃だよ。」
と声をかけました。いつもなら、

「おお、彩乃かあ。」
と言ってくれるのに、その日は何も言ってくれませんでした。わたしはこの時、初めて、本当におじさんは死んでしまったんだと思いました。

その日、わたしのおじいちゃんは、おじさんといっしょに、会場の部屋にとまりました。お母さんは、

「おじいちゃん、弟といっしょにすごせるのはこれが最後の夜だもんで、昔話をいっばいするんじゃないの。」

と、わたしに言いました。それを聞いて、わたしは、わたしにとってはおじさんだけど、おじいちゃんにとっては弟なんだと思ったら、何だ

入賞
おめでとう

菅公賞

さよなら ドンキーのおじさん

愛知県蒲郡市 蒲郡東部小学校 4年

坂本 彩乃

指導者 杉浦 容子

「ただいまー。」

去年の秋休みになる少し前、休みになるうれしさで、わたしはウキウキしながら家へ帰りました。いつもなら、お母さんの、

「おかえりー。」

と言う声があるのに、その日は返事がありませんでした。どうしたのかなあと思いつながら部屋の中へ入ると、お母さんがあわてた様子で何かのしたくをしていました。わたしが、

「お母さん、何しとるの？」

と声をかけると、お母さんは、わたしが帰って来たのに気づいてなかったみたいで、はっとしてわたしの方を見ました。そして、まじめな顔をして、

「ドンキーのおじさんが死んじゃっただよ。」

と悲しそうに言いました。

「はっ？ おじさんが死んだ？」

わたしは、目をまんまるく開いて、

「いつ？ 何で？ どうして？」

と続けてお母さんに聞きました。お母さんは、

「お母さんも、今、聞いたとこでよく分からん

だよ。とりあえず、たのまれたものを持って手伝いに行ってくるで、る守番たのむよ。」

と言って、いそいで出て行ってしまいました。

ドンキーのおじさんとは、わたしのおじいちゃんの弟で、おじいちゃんよりも十さいも年下です。ドンキーと言う名前の犬といっしょに一人ぐらしをしていました。おじいさんの家は、わたしの家と近くなので、よくドンキーを連れて遊びに来ていました。

「ワン、ワン、ワン」

その声を聞くと、わたしと妹は、

「ドンキーのおじさんだ。」

と言って、急いでおじいさんの所へ行きました。

おじいさんは、何年も前から、パーキンソン病と言う重い病気にかかっていたいました。この病気は、今でも完全になおすことができない病気です。だから、おじいさんは、病気のために、自分の思うように体が動かせず、手や足がふるえたり、動きがとてもスローモーションでした。

おじいさんは、前に、こんな話をしてくれたことがありました。

かとてもやりきれない気持ちになりました。なぜなら、わたしにも妹がいます。もし、妹がわたしよりも先にいなくなってしまうたらと考えたからです。みんなの前で、しっかりとふるまっていたおじいちゃんの悲しみがどれだけ深いか気づかされました。

次の日、おそう式に出席しました。たくさん

の人がおまいりに来てくれました。おきょうを讀んで、祭だんに手をあわせて、おしょうこうもしました。そのとき見たいいのおじいさんの顔が、わらっていたのをよくおぼえています。

そして、おきょうが終わると、ひつぎを開けて、

おじいさんのまわりにきれいな花をしきつめてあげました。わたしは、おじいさんとはもうこれが最後だと思つたら、しぜんと目からなみだがこぼれてきました。となりにいた妹も、目を真っ赤にして泣いていました。お父さんも、お母さんも、おばあちゃんも、そして、おじいちゃんも、みんな目からなみだがあふれていました。そこにいた全員が、きつとわたしと同じ思いで悲しんでいたにちがいありません。

そして、火そう場へい動しておじいさんと本

当に最後のおわかれとなりました。わたしは泣きながら手をあわせて、おじいさんが焼き場に入っていくのを見送りました。重そうな鉄のどびらが閉まると、ゴーツという音がして火がついたようでした。

数時間して、おじいさんは、ほねだけになって

帰って来ました。火の熱でまわりはとても熱かったです。わたしはこの時、初めて人のほねを見ました。少しドキドキしました。でも、ちゃんとしないといけない、と思って、竹と木の二種類の長いぼうを、はしのようにして、ほねを拾っていきました。頭の方のほねを拾おうとすると、何か、黒くかたまつた物がありました。わたしは、おじいちゃんに、

「これ、何？」

と聞くと、おじいちゃんは、

「これかあ？ これ頭に入れたった電池だなあ。」

と言いました。わたしは、おじいさんが教えてくれたあの話、本当だったんだと思いました。

人が死ぬと言うことがこんなにも悲しいと思ったことはありませんでした。おじいさんのように病気にも負けない強い心を持ち、人にあいされる人間になれるよう、わたしも毎日を一生けん命、生きていきたいと思いました。



入賞
おめでとう

菅公賞

岡山県岡山市 吉備小学校 5年

富田 遥斗

いろいろな仕事を体験して

大きくなったらどんな仕事をしたいか皆からよく聞かれるけれど、ぼくはどんな仕事をやりたいかよく分からない。でも五年生になった今年の夏休みで初めて仕事を体験した。

まず、かわらのとそう。ひいおじいちゃんの家で古くなってさびついたかわらを、おじいちゃん達と一緒にとそうの仕事をした。

最初に、高い所の作業をやりやすくするために丸太をはり金でつなぎ合わせて足場作りをした。

次に、できあがった足場に登ってかわらのさびや、よごれをタワシやスポンジでこすり落とした。こすると出たよごれをホースを使って水で洗い流した。

最後に、ローラーでペンキをぬっていく。かわらの上に登って作業をしていたので、日光が直接当たってかわらがあつく大変だった。

毎日この仕事をしている人は外の作業だから、夏は暑く、冬は寒かったりしてペンキのおいもがまんしないといけないのでとても大変な仕事だと感じた。

次に草かり。

ひいおじいちゃんの家に行った時に、広くて急な坂を一人で草かりをしているのを見て、大変そうだったので手伝いをした。

ひいおじいちゃんが草かり機で草をかってぼくは熊手という物でかられた草を坂の上から下へとおろした。

ぼくが下に落としたりした草をひいおじいちゃんや、草を燃やす場所まで熊手で運んでいたのでも、熊手で真似をして運んだ。

たったこれだけの仕事でもとても大変だった。

ぼくの家の庭の草取りは一人でもじゅうぶんできる。でもひいおじいちゃんの家は広く、いつも一人でこれだけの仕事をしていると思うととても大変な仕事だと思った。

こんどぼくがひいおじいちゃんの家に行った時、草かりをしていたら手伝いをしようと思った。

その次に、ブドウのしゅうかく。ぼくにはもう一人ひいおじいちゃんがいる。ひいおじいちゃん達はおいしい果物をたくさんつくっている。家に遊びに行くとブドウが食べごろだったのでしゅうかくの手伝いをさせて

もらった。

ブドウを育てている場所に行くとおいしそうなブドウがとてたくさんあった。

ひいおじいちゃんはブドウを包んでいるふくろのはしを切って中身を見ると「これがいいぞ」と教えてくれた。中身を見ると、今にも包んでいるふくろがやぶれそうなくらい、中身の一つぶ一つぶがとても大きかった。

ひいおじいちゃんはブドウのくきを素手で折ってしゅうかくをしていた。真似をしようとしたけれど、かたくとてもぼくの力では折ることは出来なかった。

ブドウや作物などを育てている人は、水の量や温度、こまめに見ることなど大変な仕事だと感じた。しかも、ひいおじいちゃんといおじいおばあちゃん二人で育てているのはとてもすごいことだと思った。

しゅうかくしたブドウを食べると、一つ一つぶがとても甘くておいしかった。

ぼくや弟が甘くておいしいと言うと、ひいおじいちゃん達はうれしそうに顔を上げて来年もおいしいブドウがつくれたらまたおいでと言ってくれた。

最後に、一番に残った体験。それは、おばあちゃんの仕事である遺跡の発掘と石包丁作り、鏡作りだ。

夏休みの子供体験教室におばあちゃんが申し込みをしてくれた。遺跡の発掘体験は、「総社神明遺跡」で行われた。

大昔の石包丁や鏡作りの技術を現代の人達に伝える仕事は、発掘の調査をして経験を積んで、今までの記録を見て勉強をしないと、質問に答えることができなかったりする。

ぼくが質問をすると、むずかしい言葉が分かりやすくして説明してくれたので、ただ答えればいいのじゃなくて話す相手によって話す言葉を変えらるといことも学んだ。

今年の夏休みは、今まで出会ったことのない仕事をたくさん経験した。修理の仕事、農作業の仕事、果物作り、昔調りなど。

世の中にはぼくが経験したことのない仕事がたくさんある。ぼくが大人になるまでには、もっとたくさんの仕事を体験してやりたい仕事に出合えるといいなあと思う。

石包丁作りは「岡山県古代吉備文化財センター」で行った。

まず石選び。センターの人がうすい石の方が子供に向いていて作りやすいと教えてくれたのでうすい石を選んだ。

その石を水につけながら目の粗い砥石と、目の細かい砥石の2種類を使いわけて穂が摘めるぐらいつつとみがいた。一生けん命みがいていたら、てんじしてある石包丁ぐらいするようになった。

ぼくが作った石包丁は色々な道具を使ったのに、ところどころ欠けている。でも、昔の人は道具も少ない中で石包丁などの生活用品を作っていたから、現代の人達よりも工夫して作っていたのだらうなと思った。

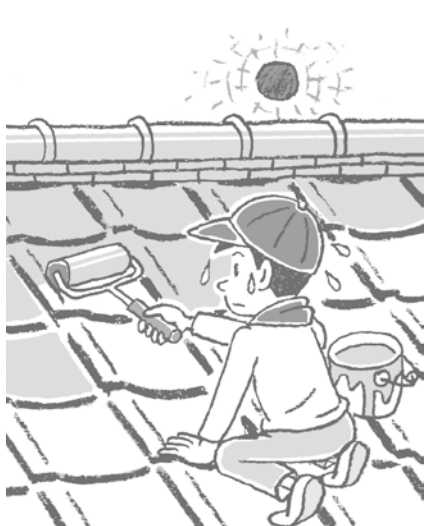
三つ目の体験は、鏡作り。鏡作りの体験は、「岡山県生涯学習センター」で行われた。

大昔では鏡は中国から伝わってきた、偉い人達しか持っていなかった生活用品。

まず、古代の鏡の 모양を再現したい型に、合金をとかした物を流し込みかたまったら取り出して、顔が映るまで目が粗い紙やすりと目が細かい紙やすりを使い分けてみがきあげる。

はつきりとはなれないけれど顔が映った時、いろいろな道具を使ってみがいたのに現代で使っている鏡と比べると映りが良くなかった。

でも大昔の人達は今と比べると映りが悪い鏡だけど、自分の顔が映った時のおどろきはぼくには想像できないくらい大きいだろうなと感じた。



入賞
おめでとう

失敗こそがチャンス

長崎県長崎市 長崎大学教育学部附属小学校 6年 山道 陽輝 指導者 高野友一

ズドン。頭を一発、ハンマーで殴られたようなショック。どんよりとした厚い雲がぼくをおおい、騒がしかった周りの声が、突然聞こえなくなりました。

ぼく達の市では、市内の六年生全員が競い合う、小学校体育大会があります。毎年、夏休みが終わると、一生懸命練習に励む六年生の姿を見てきました。今年は、いよいよ自分達の番。しかし、運動が苦手なぼくにとっては、気の重い行事です。

そんなぼくが、今年の四月、大きな決意をしました。

です。疲れている日は、「今日一日くらい、休んじゃえ。」という悪魔の声が……。負けそうになる気持ちをおさえ、

習を終えました。しかし、次の日。前日の練習で、体はカチカチ。脳からの指令にも、体が応えてくれません。ロボットのようなぎこちない動きで、一回走る度に息が上がり、足に痛みまで感じるようになってきました。休憩をとりながら練習をくり返しますが、足についたおもりは重くなる一方で、タイムもどんどん遅くなります。ハードル間を三歩で走るという目標までは、まだまだ程遠く、先の見えない道を見つめて、ぼくは押しつぶされそうな気持ちでした。心の中では、

（五十メートルハードル走の選手になるぞ。）

ぼくのお父さんは、ハードルの選手でした。高校生の頃、県内でトップレベルだったそうです。

（絶対、ハードル選手になるぞ。）

（お父さんみたいになりたいな。）

（逃げな！）

お父さんからアドバイスをもらい、四月から自宅で、筋力トレーニングを始めました。十五分程の簡単なトレーニングでも、運動を日課としていないぼくにとっては、辛くて長い十五分

かかったり、たおしてしまったり……。それでも、お父さんの指導を受けながら、くり返しとびました。練習のかいあってなんとか一つのハードルを、タイミングよくとべるようになり、足についていた重いおもりはいつの間にか消え、バネでもついているかのような軽い足どりで、練



をこえなければならぬという事に気がつきました。

祈るような気持ちで耳をすましていると、よばれたのは、友達の名前でした。

（負けるもんか。）

（苦手なんだから、仕方がないさ。）

「雨のひどくなるし、これ以上無理したら、本番に差し支えるけん、これで最後にしよう。」

（ハードル選手になるぞ。）

「とび方のきれいかねえ。」

（失敗こそがチャンス!! 次は、絶対に負けるもんか!!）